

## ホモ・ドゥプレクスの「統一性」ヴェルレーヌ『平 行して』をめぐって

岡, 由美子

<https://doi.org/10.15017/10010>

---

出版情報 : Stella. 18, pp.157-169, 1999-06-10. Société de Langue et Littérature Françaises de  
l' Université du Kyushu

バージョン :

権利関係 :



## ホモ・ドゥプレクスの「統一性」

—— ヴェルレーヌ『平行して』をめぐって ——

岡 由美子

1883年4月、リュシアン・レチノワが23才の若さで急逝する。青年は、奪われた実子ジョルジュの代わりにヴェルレーヌが「父性愛」をそそぐ対象であると同時に、揺らぎ始めた信仰の支えにほかならなかったのだが<sup>1)</sup>、この「息子」の喪失を機に詩人の生は荒廃の度をふかめていく<sup>2)</sup>。常軌を逸する飲酒癖が復活し、1885年には泥酔の果てに母親を殺そうとしてヴージェの監獄にひと月収監されるほどになった。また歯止めない浪費が貧困生活に拍車をかける。さらには不特定多数の若者たちとの性的乱行、娼婦たちとの交際。つねに愛情ぶかい庇護者だった母親が1886年にこの世を去ったことや、前妻マチルドの再婚によって復縁の望みが完全に潰えたことも、ヴェルレーヌの「転落」を加速させる要因となった。

『平行して』(1889年初版)に収められた詩編のほぼすべてが、このように1883年を境に始まる頹廃を如実に反映している。たとえばサッフォー風のソネ集「女友達」「娼婦たち」など女性にかんするエロチックな詩編群と同時に、ランボー死去の誤報(1887年)に接して書かれた「喜びと放浪」をはじめ、男性同性愛を称賛する数編が見られる。また放蕩のうちに得られたマージナルな自己認識——「恥知らずな男」や「くぼ地の道をゆく哀れな男」など——を呈示する少なからぬ詩編は、ベルギーでの下獄時に執筆されていた詩編群「失礼ながら」と陰気に呼応しているし、再婚したマチルドへの愛と憎悪が混在する作品がサディズムの匂いを漂わせていることも看過できない。くわうるに『ポエム・サチュルニアン』『雅な宴』など1880年以前に執筆された詩集をパロディ化する、あるいは否認する詩編は、あたかも自身の生にひとつの区切りをつける試みのようにさえ見えるのだ。

ところで、ヴェルレーヌは『平行して』について語るさい、つねに詩集のは

らむ「官能」性に言及せずにはおれない。その事実じたいが、詩集の中心テーマの在処をあかすとともに、この主題にたいする彼の敏感な意識を示唆しよう。本稿では、まずヴェルレーヌの言説を分析することによって『平行して』に込められた文学的戦略と、背後にひそむ内面の葛藤をあきらかにし、つづいてその葛藤を生みだしている詩集の「官能」性について考察する<sup>3)</sup>。

## 1

1883年以降ヴェルレーヌは自作品にかんして説明的言辞を惜しまなくなるが、なかでも『平行して』にかんしては並外れて多弁である。したがって、まずは彼の言葉を再読することで詩集の位置づけを確認しよう。

『平行して』初版の序文には『『叡知』『愛』そしてまたこれらの続編であり完結編である『幸福』に《平行して》<sup>4)</sup> という一文が見られる（なお、言及されている3作品は、それぞれキリスト教の三対神徳「信徳」「愛徳」「希望」を例示する意図から着想された「キリスト教詩集」である）。ここで「平行」という表現に注目しよう。当時の書簡を繙くと、たしかに『愛』または『幸福』にあてた詩編と『平行して』にあてたそれが同時進行で執筆されていたことがわかる。とはいえ「平行」は、単に執筆の同時性だけを指しているのではない。じつは初版の序文には、それが添えられた理由として、『平行して』のもつ「独特の調子が惹起しかねない抗議に〔あらかじめ〕応えるため」と付言されているのである。

この点についていまだ少し鮮明なイメージをつかむために、『呪われた詩人たち』の第2集として1886年に雑誌掲載された「ポーヴル・レリアン」論の一節を読もう（ここでヴェルレーヌは3人称のかたちで自らを論じている）――

彼の作品は1880年以降、明確な2つの部分に区分されるが、将来の書物の出版趣意書にはつぎのような点が示されるだろう。すなわち、彼にはこのシステムを継続し、絶対的に異質な観念にもとづく著作、——もっと正確に言えば、カトリシズムがその論理、魔力、魅惑、激しい恐怖を繰り広げるような書物と、純粹に世俗的な、つまり悲痛なまでの上機嫌さを持ちつつ官能的であり、生にたいする誇りに満ちた書物を、同時にとまではいかなくとも（それにこの点は便宜の偶然性によるのであり、議論からははずれている）平行して出版するという既成方針があるのだと。<sup>5)</sup>

フェリシアン・ロップス宛書簡にも明示されているが、ここで「カトリック的」書物として『叡知』『愛』『幸福』が、「世俗的・官能的」なものとして『平行して』が念頭におかれている点に疑念の余地はない。また別の書簡では後者にかんして「無邪気な官能が表現されており、『叡知』と『愛』における非常に誠実なカトリックの神秘主義と対照をなす」と記されていることもつけ加えておこう<sup>6)</sup>。これらの点から「平行して」という表現はつぎのようなことを含意しているといえよう。すなわち、創作において2つの対極的な観念、「神秘主義」と「官能」との並存であり、またそれらを同時に——少なくともそういう印象をあたえるようなかたちで——出版しようとする意志の表明である。しかしながら主題の対照性を強調するいっぽうで、ヴェルレーヌが『叡知』『愛』『幸福』と『平行して』を全体でひとつの作品とみなす見解をくりかえし述べていることも忘れてはなるまい。とりわけ『平行して』第2版の「はしがき」は同書を「禁書収納室」と位置づけることによって、3冊のキリスト教詩集と『平行して』との主題的一貫性を主張し、後者の孤立化を予防しているのである<sup>7)</sup>。

かくして、対照性と整合性をともに強調しつつ2種類の基本観念を並置してみせる、またそれらにもとづく2つの作品群を交互に公表する「システム」を標榜する——こういった言説がめざすのは異質性を相殺すること、『平行して』に即して具体的にいうならば、「官能」という「独特の調子」を漸減することにほかなるまい。

「二重の男 homo duplex によるシステム」<sup>8)</sup> という表現を俟つまでもなく、「平行」の観念がヴェルレーヌの内面の分裂にかかわっていることはあきらかである。しかしながらその分裂とは、詩人の主張にもかかわらず、「神秘主義」と「官能」とをめぐる軋轢であるとは考えにくい。キリスト教的「神秘主義」との「平行性」を飽くことなく強調せずには詩集の「官能」性に言及しえないというその事実じたいが、読者の予想される反論にたいする単なる予防策というよりは、ヴェルレーヌの内なる激しい葛藤を示唆しているといえよう。じじつ、1888年のロップス宛書簡では「あなたは私がそこ〔『平行して』〕に盛り込みたいと思ったもの、つまりときとして自らの悪徳にまったく率直で正直である私という人間を見いだすことでしょう<sup>9)</sup>」と、「悪徳」をとらえる自己の「誠実さ」が主張されるいっぽう、前年のシャルル・モリス宛書簡に「『平行し

て』は私が説明しうるあらゆる〈悪しき〉感情の排水溝であり、ごみ捨て場です<sup>10)</sup>と告白されていたように、詩集が表現する「官能」にたいするヴェルレーヌの姿勢はじつはきわめて曖昧なものなのである。

この点にかんしては、先にふれた「ポーヴル・レリアン」論においても同様であろう。異質な傾向の詩集をもつ詩人にとって思想の統一性は存在するののかという問いに、彼はつぎのように肯定する――

しかしそれ〔統一性〕は存在する。人間として、われわれの眼にはおなじことだがキリスト教徒として、それは存在するのだ。私は信じる、そして行為によっても思考によっても罪を犯す。私は信じる、そして思考によってよりよきを求めて悔い改める。私は信じる、私はそのとき善きキリスト教徒である。私は信じる、私はつぎの瞬間には悪しきキリスト教徒である。罪にたいする記憶、期待、祈願は私を歓喜させる。それは悔恨を伴って、あるいは伴わずして、ときとして形をさえもち、もっとしばしば「罪」のすべての結果を備えて現れる。肉と血はそれほど強烈で、自然で動物的であり、すぐれた最初の自由思想家の記憶、期待、祈願も同様に激しいのである。<sup>11)</sup>

これはおそらく、信仰と背信そして改悛にかんする偽らざる告白であろう。しかしヴェルレーヌが自らのカトリック詩は世俗詩を包含すると強調していたように、ここで「信仰」は「背徳」のアンチテーゼとして、「官能」を「罪」という言葉に置き換えるために機能しているにすぎず、葛藤をつき動かす主動力とはなりえていないのだ。その点は、『平行して』と同時進行のかたちで執筆されていた『愛』や『幸福』の詩編において、信仰が回心当初の新鮮さや素朴さを失い、極度に教義的な様相を呈していることからもうかがえよう。むしろ真の葛藤は「魂を責めたてる肉の悪夢」<sup>12)</sup>によって惹起されており、いわば「官能」の受容そのものにかかわっていると考えられる。

つまり、ここで「神秘的人間にして官能的人間」<sup>13)</sup>であるという自己の「統一性」を主張する声は、「官能」を肯定することで葛藤の収束を夢みる「願望の声」にほかなるまい。じじつ、このような希求は『幸福』所収の詩編「『平行して』にかんして」にいっそう直截に表現されている――

〔…〕神よ、わたしの願いをご覧ください、  
わたしの弱さの叫びをお聞きください、  
わたしが欲するものを欲するために

あらゆる素直さをお授けください。<sup>14)</sup>

依然として信仰を絡めた文脈において語られているとはいえ、「欲するものを欲する」ための「素直さ *simplesse*」<sup>15)</sup> を求めるヴェルレーヌの懇願は、前述の「統一性」がやはり理想にすぎぬことをあかすとともに、詩集を公刊しはしたものの、その「官能」性を全面的には肯定しえぬ内面の軌轢をはっきりと表しているといえよう。

## 2

ヴェルレーヌはキリスト教詩集の「神秘主義」と『平行して』の「官能」性とを対応関係においていた。しかしながら「平行性」は、彼が言うように詩集の外だけにあるのではなく、むしろその内部にこそ本質的なものとして存する。すなわち、冒頭の詩編「アレゴリー」が好色なフォーンと水の精ナイアスの艶事によって両性具有の詩人の運命をすでに象徴するように、詩集が内包するのは、「男性」性 / 「女性」性という、ヴェルレーヌ自身が体现する「平行性」にほかなるまい<sup>16)</sup>。

まず「男性」性の方は詩編群「娼婦たち」にもっとも直截に表現されているといえよう。この詩編群では、娼婦たちの肉体がときに生々しい体臭や「味わい」の表現をまじえながら細部にいたるまで描写されるが、注目すべきは詩人の称賛が、終わりのなき肉欲再生の場としての女体、「官能の祝祭を誇る体」にむけられている点であろう――

〔…〕 いたるところで、果てもせず、自らの官能に  
 約束された祝祭を誇るおまえ 〔…〕  
 なぜならおまえは知っている  
 私の肉体が度を超して  
 おまえの肉体を熱愛していることを、そしてこの崇拜ゆえに、  
 死は終わるたびに――何という死！――  
 新たに生まれ、何という騒々しさのなか！  
 再び、もっと強烈に死んでいくことを 〔…〕 [GCEP, 449]

これにたいし、「女性」性の産物ともいうべき一連の詩編は興味ぶかい対照

を見せる。たとえば詩編「この情熱」では、男性同性愛が祭儀によって神聖化されたものと見なされ、「自然の解放をめざす闘いの証人」として彼らの英雄的行為が称賛されている。さらに注目すべきは、男たちの「情熱」が完全な充足をうるのは、なによりも「魂と血」つまり精神と肉体との強固な結合によるとされている点だ――

〔…〕この情熱は魂と血の壮麗さで飾られている  
それに比すれば普通の愛は  
悦楽、あるいはエロチックな要求でしかない〔…〕 [GCEP, 478]

彼ら男性同士の愛が体现する「完全さ」に比すれば、異性愛など「エロチックな欲求」にすぎないと断定されているのである。また、魂と肉体が一体となった「満たされた情熱」は、ランボーとの出奔をうたった「喜びと放浪」にも同様に表現されていることを指摘しておこう。

ランボーの名が出たのでさらに付言すれば、『平行して』に収録された一連の同性愛詩編には、「喜びと放浪」はいうまでもなく、いずれにもかつての「地獄の夫」の影がつきまどっている<sup>17)</sup>。1887年に伝えられたランボー死去の誤報によって、年少詩人の思い出がヴェルレーヌのうちに一気に横溢したとしても不思議はない。しかしそれ以上に興味をひくのは、ジャック・ボレルが指摘するように、彼にとって同性愛がランボーの傍らで生きられた詩的体験と不可分のものになっていた点であろう<sup>18)</sup>。じじつ、詩人たる意識を問い直そうとするヴェルレーヌの試みは『平行して』にはっきりと形跡をとどめている。たとえば否認やパロディ化による初期の作品世界の書き換えがみられる<sup>19)</sup>。そのひとつ「ポエム・サチュルニアン」において、ヴージュエの監獄を出所後、泥酔してうろつくヴェルレーヌの「胆汁」は「燃えあがり」、「欲情は混乱して」おり、いっぽう「レズビアンのような眼をした3人の悪ガキども」が彼の「しかめ面をじろじろといつまでも見ている」[GCEP, 468]<sup>20)</sup>。詩人は処女詩集の巻頭詩に、「土星びと」の意志や理性を無効化する破壊的な力を、肉体の内部で起こる生理現象――「胆汁」の作用――として比喩的に表現していたが、詩編「ポエム・サチュルニアン」はまさに「土星びと」の「呪い」の由来が、飲酒癖とともにその同性愛にあったことをあかしているといえよう<sup>21)</sup>。またなに

よりも「土星びと」が暗に「呪われた詩人」の同義語であった点を忘れてはなるまい<sup>22)</sup>。くわえて『平行して』に収録された少なからぬ詩編において、情欲で眼を輝かせる「へとへとに疲れた徘徊者」[GCEP, 470], 「くぼ地の道をゆく哀れな男」[GCEP, 472], 大道の「轍の跡を斜めになって歩く〔者〕」[GCEP, 474] などと自らを描くことによってマージナルな自己認識がくりかえし示されている事実を想起しよう。

男色家、酔漢、社会的落伍者——「呪われた者」としての自覚が、ヴェルレーヌのなかでは詩人たる意識と二重写しにとらえられていたことは、詩編「カプリーチョス」にはっきりと読みとることができる。彼が真の詩人と見なすのは、狂人ネルヴァルのごとく「ヴィエイユ・ランテルヌ街で首を吊るような男」にほかならないのだから——

おお、詩人よ、偽りの貧者にして偽りの富者、真実の人よ〔…〕  
 つまりはヴィエイユ・ランテルヌ街にぶら下がり、  
 星空の下を歩くような男〔…〕  
 赤貧の人〔…〕ただひとりの真実の人〔…〕  
 おまえのように気が違うほど  
 妻も家もない者たちの心を暖めるために月を愛し、  
 不運な心を静かに揺するために、ああ、死を愛することのない人々には  
 お気の毒さま〔…〕  
 さあ、詩人よ、唯ひとりの真実の人よ、  
 死して救われよ〔…〕[GCEP, 483]

「月」と「死」を愛し、狂気をえて不遇のうちに死にゆく。しかし救済は死そのものによってもたらされる。こういった詩人像から、われわれはとくに初期の習作「タッソー」を想起せずにはおれない。というのもそこでヴェルレーヌは「冒険に破れた狂人」、社会的異端者としての詩人の苦難と栄光という二律背反を表現していたのだから。複数の初期詩編で、さらには『ポエム・サチュルニアン』の巻頭詩で問題にされていた詩人の「不運 guignon」——『平行して』を書くことでヴェルレーヌはこの問題に再び立ち戻ろうとしているのである。リュシアン・レチノワの死後、荒廃を極めていた彼の生を思えば、アンチテーゼの果てに救済を見いだす試みが再度なされていたとしても不思議はあなるまい。



ところで処女詩集の巻頭詩では、詩人の「至高の力」<sup>23)</sup>でもある想像力が、彼の生を破滅に導く邪悪な力、「落ちつきなくひよわい想像力」として否定的に描かれていた。詩人特有の精神活動がはらむ2つの相反する力を受け入れ体現することこそ、彼が「カプリーチョス」で求めている救済の大前提であるはずだ。しかしながら『平行して』には「呪われた者」となる恐怖を完全に克服することができないヴェルレーヌの姿も同時に浮かび上がる。この点を検討するために、まずは詩編「色欲」を読むことから始めたい。

このソネは、最初は「祈り」の題で1873年のエドモン・ルペルティエ宛書簡に挿入され、84年に改稿をへて現行タイトルのもと『リュテース』誌に初出、その後『遠い昔と近い昔』に収録されたものだ<sup>24)</sup>。ソネの4行詩に歌われているのは、それぞれ「肉 Chair」と「愛 Amour」である。前者が「強者たちの楽しい食事」の喩えどおり、肉体的快樂を意味するのにたいし、後者は神秘的な喜び——「サバトが選ぶ呪われし者たちのパン」——をもたらす。ランボー体験から直接に着想されたと見なしうる1873年版から、相反する2要素を統合する「秘密」をかいま見ることができよう——

肉よ！ 愛よ！「不在」へとむかうあらゆる欲望よ  
 すべての倒錯とすべての純潔よ〔…〕  
 私はおまえたちに懇願し、挑戦する、  
 嘆き、嘲る、〔…〕おまえたちの恐るべき謎を知ること、愛よ、肉よ。<sup>25)</sup>

せめぎ合う「肉」と「愛」、「倒錯」と「純潔」は、「不在 l'Absence」においてひとつに統一されうる。しかしそれは同時に「恐るべき謎を知ること」にはほかならない。詩編「この情熱」や「喜びと放浪」において、男性同士の「情熱」が、まさしく肉体と精神の結合ゆえに完全に満たされたものとして描かれていたことを思いだそう。つまり同性愛において「肉」と「愛」、すなわち肉体的快樂と神秘的な喜びは共存し、ともに充足されうるのである。またヴェルレーヌにとって、ランボーに導かれた詩的体験が同性愛と分別しがたいものだった点を忘れてはなるまい。「倒錯」と「純潔」が統一される同性愛のなかに、ヴェルレーヌは「謎」を解明する詩人の「奥義」をかいま見ていたのだろう。だがその「謎」は「恐るべき」ものと見なされ、ボレルも指摘するように

「有罪」を宣告されずには解明されえないのだ<sup>26)</sup>。ここでは「謎」そのものについては問わないが、少なくとも「呪われた者」となるのを恐れる理由のひとつに、自身の同性愛を完全に受容することへの躊躇があったのはまず間違いあるまい。さらに付言すれば、「不在」という表現には、同性愛が象徴する「不毛」への、ひいては「死」への暗示が読みとれよう。「死」への本能的な恐怖もまた詩人の内に存在していたに相違ない。

『平行して』にもどろう。ヴェルレーヌの同性愛観を確認した今や、ソネ「釈明」においてこの種の愛が「至福」——「友の心臓のうえて血を流す〈幸福〉／彼の胸のうえてさめざめと涙を流す欲求」——として描かれていたとしても不思議はあるまい。これにたいし対句的に後続する4行詩では、詩編群「娼婦たち」と同様に、肉欲の充足を異性愛の第一義とみなす見解が示される。すなわち女たちとの関係は、あくまでも肉欲に追従して「猥褻な機械」と化すことであり、結果として生理的な「飽満感」がもたらされるにすぎないのだ——

数多くの美しい敵をもつ不幸、  
猥褻な機械であることにたいする飽満感〔…〕 [GCEP, 464]

ところで、同性愛の「幸福」と異性愛の「不幸」という相反するモチーフにたいし、つづく2つの3行詩がそれぞれ「死」と「生」のイメージをあたえることで呼応している。同性愛が殉国・殉教と等しく「死」と結びついた自己消滅的な愛と描かれるいっぽうで、女たちの乳房や性器はまさしく「生」の象徴ととらえられているのである——

祖国のために、神のために、他者のために死ぬ  
裏切らない腕に、嘘をつかない口に、清らかに口づけながら〔…〕  
恋人たちの明るい乳房のために、輝く目のために  
「その他」のもののために生きる！ かくも「不名誉な死」にむかって！ [ibid.]

ここで同性愛はたしかに「幸福」とみなされており、称賛は愛ゆえの「死」にむけられている。しかしながら「不名誉な死」をくりかえす生の営みへの執着に、「呪われた者」となる恐怖が絡んでいるのはあきらかであろう。詩編群

「娼婦たち」のつぎの一節を読もう——

ああ、おまえの体が  
 陰鬱な私の魂のうえに乗り  
 それを窒息させてくれたら！〔…〕  
 若々しい交わりで  
 私の「誇り」をつんのめらせておくれ。  
 おまえの浮かれた尻の下で！〔GCEP, 447〕

同詩編群において詩人の称賛が、終わりなき肉欲再生の場たる娼婦たちの肉体にむけられていたのを思いだそう。それはまさしく彼女たちの「破廉恥な」肉体や「浮かれた joyeux」性器によって彼の「魂」を押し殺し、「呪い」を一掃してもらうためにほかなるまい。つまり、真の詩人にのみもたらされうる「救済」を希求しながらも、やはりヴェルレーヌは「呪われた者」となる恐怖を完全には払拭することができないのである。肉欲の楽天主義に生のエネルギーをもとめる逃避の試みがそのことをはっきりとものがたっている。

\*

本稿においてわれわれは、『平行して』をめぐる2つの「平行性」を確認した。まずはヴェルレーヌの証言によりながら、同詩集の「官能」性とキリスト教詩集の「神秘主義」との通時的次元での並存関係を。つづいて『平行して』の読解をつうじて、詩人自身が体现する「男性」性／「女性」性というさらに本質的・内在的なそれを。しかし今2者をふりかえて見ると、これらがいずれも「統一性」をめぐる希求と葛藤から生じていたことはあきらかだ。神秘主義と官能、男と女、愛と肉——homo duplex と自称しながら、内面の二重性にヴェルレーヌはたえず動揺し、おびえていたのではないか。

ところで詩編「この情熱」は、1889年2月『クラヴァッシュ』誌に掲載されたさい、詩集のタイトルを先どりし「平行して」と題されていた。さらに、初版の序文が覚書として雑誌初出のさい同時に掲載されたのは詩編「喜びと放浪」であった。これらの事実はものがたっていないだろうか。詩集が提示する主題系のなかで、ヴェルレーヌの意識をもっとも刺激し、「官能」性の肯定

をめぐる葛藤をひきおこしていたのは、やはり同性愛受容の問題だったのだ、と。同時にそれが詩人としての救済を求める曖昧な姿勢に関連していた点については本稿に指摘したとおりである。

## 註

- 1) この点にかんしては、拙論「ヴェルレーヌとリュシアン・レチノワ」、『ステラ』第13号、九州大学フランス語フランス文学研究会、1994年3月、35-45頁を参照されたい。
- 2) じじつ、1883年12月末のシャルル・モリス宛書簡には「精神的混乱の極みにある」と告白されているうえ、翌年9月には「恐ろしい、打ちのめすような神経の発作につづく昏睡状態」について記されている (voir les lettres à Charles Morice, 30 décembre 1883 et 16 septembre 1884, in Paul VERLAINE, *Lettres inédites à Charles Morice*, publiées et annotées par Georges ZAYED, Paris: Nizet, 1969, pp. 54 et 70)。また、レオ・ドルフェール宛書簡のなかで「1875年から1883年までのほとんど隠遁者のように非常に立派だった生活。[…] 1883年から現在までの放埒な生活」と述べられている事実から、「転落」の契機がリュシアンの死にあったことはあきらかであろう (voir la lettre à Léo d’Dorfer, 23 octobre 1887, in *Correspondance de Paul Verlaine*, Paris: Messein, 3 vol., 1922-1929, tome III, p. 261)。
- 3) ヴェルレーヌ作品からの引用はプレイアッド叢書の2巻 (Paul VERLAINE, *Œuvres poétiques complètes*. Texte établi et annoté par Y.-G. LE DANTEC. Édition revue, complétée et présentée par Jacques BOREL. Paris: Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1962; *Œuvres en prose complètes*. Texte établi, présenté et annoté par Jacques BOREL. Paris: Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1972) により、以下それぞれ (EP, CEPR) の略号をもちいて出典を示す。また『平行して』からの訳出・引用箇所にかぎって、初版 (VERLAINE, *Œuvres poétiques*. Texte établi avec chronologie, introductions, notes, choix de variantes et bibliographie par Jacques ROBICHEZ. Paris: Garnier, 1986) を使用し、GCEP の略号とともに頁数を本文中 [ ] 内に示す。邦語訳はすべて拙訳によるが、『呪われた詩人たち』については鈴木信太郎 (筑摩世界文学体系48『マラルメ、ヴェルレーヌ、ランボー』, 1987年所収) を参照した。
- 4) «Préface (de 1889)» pour *Parallèlement*, in CEP, p. 483.
- 5) «Pauvre Lelian», *Les Poètes maudits*, in CEPR, p. 688.
- 6) Voir la lettre à Félicien Rops, 11 février 1888, in *Correspondance de Paul*

*Verlaine*, op. cit., tome III, p. 315 ; la lettre au même, 5 janvier 1888, in *ibid.*, p. 313.

- 7) Voir «Avertissement (de 1894)» pour *Parallèlement*, in *CEP*, p. 483.
- 8) «Paul Verlaine», *Les Hommes d'aujourd'hui*, in *CEPR*, p. 767.
- 9) Lettre précitée du 11 février 1888 à F. Rops, in *Correspondance de Paul Verlaine*, op. cit., tome III, p. 315.
- 10) Lettre à Charles Morice, 29 août 1887, in *VERLAINE, Lettres inédites à Charles Morice*, op. cit., p. 89.
- 11) «Pauvre Lelian», in *CEPR*, p. 689.
- 12) F.-A. CAZALS et Gustave LE ROUGE, *Les derniers jours de Paul Verlaine*, Paris: Mercure de France, 1923, p. 263.
- 13) «Pauvre Lelian», in *CEPR*, p. 689.
- 14) «À propos de *Parallèlement*», *Bonheur*, in *CEP*, p. 694.
- 15) 『ある男寡の回想』(1886年)のタイトルが、当初「ある素朴な男の冒険」と予定されていた事実からもあきらかなように、当時のヴェルレーヌには自身を *homme simple* とみなそうとする傾向がはっきりと認められる。「統一性」の主張と同様、これも現実とは逆転した希求の表れであろう。
- 16) 『平行して』とほぼ同時期に執筆されていた小説『ピエール・デュシャトレ』と『ルイズ・ルクレール』の主人公たちにも、ヴェルレーヌの体現する両性の分身を認めることができる。
- 17) 詩編「釈明」にはランボーとの放浪の産物たる「詩人とミューズ」の一節がエピグラフとして付されている。また同詩と「別の釈明」が雑誌に掲載されたさいには前者がランボーに、後者がマチルドとランボーに献呈されていた。Voir «Notes et Variantes» de BOREL pour *Parallèlement*, in *CEP*, p. 1210.
- 18) Voir la «Notice» de BOREL pour *Parallèlement*, in *CEP*, p. 478.
- 19) ロップス宛書簡には、『叢知』に先だつ詩集を破棄する意向が示されている。Voir la lettre précitée du 11 février 1888 à F. Rops, in *Correspondance de Paul Verlaine*, op. cit. tome III, p. 314.
- 20) 同詩の背景は自伝的散文『一杯』にうかがうことができる。ボレルは「実をいうと、この帰還はいくらか悪徳に導かれたものだった」という一節から、ヴージュエの監獄を出所直後になされたアルデンヌ放浪は、1883-1884年の放蕩の相手だった少年たちと再会するためだったのではないかと推測する。Voir la «Notice» de BOREL pour les *Œuvres autobiographiques*, in *CEPR*, pp. 1216-1218.
- 21) また、別の「改詠詩」である「最新の〈雅な宴〉」においても、皮相な快楽の追及に終始していたヴァトーの楽園世界と訣別し、詩人が船出するのはまさしく「ソドムとゴモラ」の方向である点を付言しておこう。
- 22) この点にかんしては、拙論「ヴェルレーヌ・サチュルニアン」、『ステラ』第17号、九州大学フランス語フランス文学研究会、1998年6月、169頁を参照されたい。

- 23) 巻頭詩とほぼ同時期に執筆された「ボードレール」論では、年長詩人に倣い想像力を「至高の力」、「諸能力の女王」として称賛している。前掲拙論「ヴェルレーヌ・サチュルニアン」、171-172 頁参照。
- 24) なお、1884 年版の 3 行詩では「糸紡ぎ女」の抱擁と「牧人」のそれというアレゴリーによって「肉」と「愛」との和解が提示されていた。
- 25) Lettre à Edmond Lepelletier, in *Correspondance de Paul Verlaine*, op. cit., tome I, p. 100.
- 26) Voir la «Notice» de BOREL pour *Parallèlement*, in CEP, p. 472.